

この九月七日は、人間魚雷「回天」創案者の黒木博司少佐が満二十三歳で殉職されてから数え六十回目の命日である。そこで今月七日には、少佐の郷里岐阜県下呂町・信貴山しきさんに合祀された「回天殉道士」たちの「回天祭」が営まれる（問合先〇五八四―九一―二四七八 橋本秀雄氏）。戦後の日教組全盛期に西濃の小中学校で育った私の場合、飛驒出身の黒木少佐も含めて軍人の功績など、ほとんど聞いた覚えがない。

ところが、昭和三十二（一九五七）年に県立大垣北高校へ進み、そこで歴史担当の稲川誠一教諭に出会い、その若い先生（当時三十一歳）から、少佐の志や「回天」の話を聴き、わずか十数年前に、そんな青年将校がいたのか、そんな特攻兵器があったのかと、ビックリ仰天した。黒木少佐は、岐阜中学校（県立岐阜高校の前身）から舞鶴の海軍機関学校へ進み、四年後の昭和十七年十二月、満二十一歳で呉の海軍工廠魚雷実験部に入った。そのころから、日本軍はアジア・太平洋の諸地域で連合軍の猛攻に晒され、次第に敗色濃厚となる。

それを知った彼は、窮状を打破するため、人間が乗ったまま敵艦に体当たりする必死必殺の特攻兵器「人間魚雷「回天」」を考案し、実験に取り組んだ。それが同十九年八月、ようやく許可されると、直ちに山口県の徳山湾で連日特訓に励んだが、悪天候も恐れず盟友の訓練に同乗して浮上不能となり、絶命するに至ったのである。しかも、彼の悲願を継いだ後輩たちは、次々と出撃し、たとえば南太平洋ウルシーで米軍艦などを撃沈させている。

このような特攻は、空でも海でも苛烈な戦いを続け、欧米人を震え上がらせた。それが戦後は、人命無視の極端な軍国主義の権化ごんげみたいに誹謗ひぼうされてきた。しかし、あの非常時に有為な青年たちが祖国・同胞のため懸命に考え敢然と行った事の意味は、もつと慎重に真剣に再検討する必要がある。一般の召集兵たちにしても、単に異常な時代の犠牲者とみなされたのでは、おそらく浮かばれない。

ちなみに、海軍機関学校第五十六期生で同窓会長の西島安則氏（元京都大学総長）も先輩の英霊に献じた慰霊祭文で引用しておられる資料だが、昭和六十三（一九八八）年のASEAN二十周年報告書を見ると、東南アジア諸国連合の首脳たちは、「東南アジアのわれわれにとって、日本の戦いは西欧の優越性についての神話を完全に破滅させ……新しい政治意識が意欲（欧米植民地支配から独立への強い決意）を奮い起こさせ」たのだ、と公式表明している。

戦争は人類の不幸な局面にちがいないが、約百年前の日露戦争も六十年ほど前の大東亜戦争も、勝敗いかんを超えて世界に強烈な衝撃を与え、二十世紀の政治地図を大きく塗り変えたことは、厳然たる事実と認めてよいであろう。